

平成26年度

地域で決める学校予算事業第1回評価会議 会議録

平成26年9月2日 会議

地域教育課

平成26年度 地域で決める学校予算事業第1回評価会議 会議録

開催日時	平成26年9月2日(火) 14時00分～15時50分
開催場所	奈良市役所 北棟2階 第16会議室
内 容	<p>○ 開 会</p> <p>1 評価委員の委嘱</p> <p>2 学校教育部長挨拶</p> <p>3 評価委員自己紹介</p> <p>4 委員長・副委員長の選出</p> <p>5 文部科学省大臣表彰の推薦について</p> <p>6 平成25年度の事業について</p> <p>7 平成26年度の事業について</p> <p>8 その他</p> <p>○ 閉会</p>
出席者(委員)	加藤久雄委員 石川 陽委員 岡田龍樹委員 中川直子委員
(事務局)	梅田学校教育部長 石原教育政策課長 城学校教育課長 松田地域教育課長(庶務) 地域教育課員5名
開催形態	公 開 傍聴人 なし
担 当 課	地域教育課

議 事 お よ び 協 議 内 容

○ 開会

- 1 評価委員の委嘱（机上にて確認）
- 2 学校教育部長挨拶

委員の皆様におかれましては、ご多用のところ、平成26年度「地域で決める学校予算事業評価会議」の委員をお引き受けいただき、誠にありがとうございます。平素より、奈良市の教育行政にご理解とご協力をいただいておりますことに対して心から厚くお礼申し上げます。

「地域で決める学校予算事業」は、今年度で5年目になります。これまで、地域教育協議会を中心に、中学校区を単位に特色ある取組が実施され、学校・家庭・地域のつながりと絆が深まってきたと感じています。

また、地域住民の支援のもと、図書の読み聞かせ、ゲストティーチャーとしての授業、放課後学習や部活動支援、環境整備支援など、各学校園において様々な取組を行っていただいております。中でも、交流の集い、フェスティバル、講演会など中学校区を単位とする取組が年々増えてきています。これも、各地域教育協議会を中心に、学校・家庭・地域が連携・協働して、地域全体で子どもを守り育てる体制づくりが着実に進んできていることの表れではないかと思っています。

さらに、事業の運営に大きな役割を担うコーディネーターも、昨年度の337名から356名となり、年々登録数が増え続けています。

今年度は、教職員研修の講師として、文部科学省から、生涯学習政策局社会教育課の谷合課長と入江係長をお招きし、学校地域支援の全国における展開や今後のビジョンなどについてご報告いただきました。そして、そのご講演の際に、奈良市は全国的にも非常に進んだ取組であると、いわば、この5年間の取組について非常に高い評価をいただきました。このような評価におごることなく、奈良市は今後、学校地域支援の更なる展開を進めてまいりたいと存じます。

評価委員の皆様には、本事業の実施にあたり、様々な立場から指導や助言をいただき、事業の評価及び検証をお願いできればと思っています。今後とも本市の事業の推進にご協力を賜りますようお願いいたします。挨拶とさせていただきます。

- 3 委員自己紹介 及び 事務局紹介

各委員自己紹介

- 4 委員長・副委員長の選出

※ 委員長には加藤委員が選出された。委員長の指名で、副委員長には瀬渡委員が推挙されたが、瀬渡委員が欠席のため、次回改めて審議する。

（加藤委員長による確認）

会議の公開、写真撮影・録音の了解

会議録の署名委員は、加藤委員長と岡田委員

傍聴者なし

◎議事

- 5 文部科学大臣の表彰校について

・事務局説明（パワーポイントおよび資料①）

- 加藤委員長： 4つの中学校区の中から1つを選ぶということですね。ご意見をお伺いしたい。客観的な数字としては、資料①の表にあるように、184.0点で同点が2中学校区、あと182.3点、次に181.9点です。上の2つから選ぶのがいいのかと思います。私たちがつけた評価点数です。会計をコーディネーターが担っている中学校区が2校です。それぞれ中身が違います。フリートークをお願いします。中川委員、実際に学校に行かれてどうですか。
- 中川委員： すでに18中学校区を回っている。たまたまだが、推薦されている平城東中学校区と登美ヶ丘中学校区は回っていない。また、平城西中学校区と富雄第三中学校区は、防災セミナーと子供プロジェクトの活動でイベント取材しているが、協議会の取材はしていない。点数の上位のどちらかということであれば、富雄第三中学校区の地域教育協議会長は、今年度変わったばかりなので、時期としては、まだ今ではないという気がしている。
- 石川委員： 点数はどうでもいいと思う。10点以下の数字で、差異は微妙である。他の校区に対する影響を考え、何が突出しているかを考えると、学校の負担を軽減しているという意味で、会計をコーディネーターが担当しているというのは、評価が高い。学校の参加というのも重要だ。登美ヶ丘では、全校園長が参加して、コーディネーターと拡大企画会議をやっている。2月のプレゼンでも、ファンドを設置し、補助金がなくなっても、自分たちでやっていくと表明したいくつかの中学校区の一つである。突出とまではいかないが、一つのモデルとして提示でき、私は登美ヶ丘がいいと思う。
- 加藤委員長： 説明が成り立たないといけな。見える化していくということで、内容で選んでいくということですね。ファンドは基金を持っているのか。
- 石川委員： ホタルファンドというものです。
- 加藤委員長： ほかの3つはどうですか。
- 石川委員： 2月の時点では、ファンドを作っているというのは、4校の中ではここだけだったと思う。
- 岡田委員： 生徒たちに配布する広報誌に、広告を載せ、1件5000円の広告料をとっています。教育系の民間事業者の広告も載せ、これはありかと思わないでもないが、ユニークな活動ではあると思います。
- 加藤委員長： 会計処理をコーディネーターが担っているところと、教頭先生がやっているところが、2対2です。これが最初の分かれ道として、コーディネーターが会計をやっているところ2つを残しましょうか。観点としては、学校に負担をかけるのではなく、その分を地域が担っている。2つ目の観点としては、ファンドの話が出ましたが、その他内容的なところでいうと、小中一貫ですね。
- 石川委員： 小中一貫教育を新しくスタートしたところは、注目が集まりやすい。ただし、富雄第三は、まったく新しくスタートするというより、地域に協力していこうという意識があった地域です。登美ヶ丘は、地域の学力支援に対して、生徒の向上がみられたとの学校の先生のコメントがあった。イベントの手助けだけではなく、支援を受けた学校側が、成果の実感があるのが大きいことだ。ここには書かれていない

ことなので根拠とするわけにはいかないもので、甲乙つけがたい。小中一貫教育と地域ファンドどちらを選んでも、注目されるという意味合いがある。教育委員会の意見も聞いてみたい。地域教育課の中ではどういった話になっているのか。

事務局： 地域教育課の中ではかなり話をしました。資料⑩に過去3年間の総合的な評価の比較がある。石川委員がおっしゃるように、推薦した4校はほぼ似たようなものである。私たちも大変判断に困り、全員で相談したのだが、強いて言うならば、富雄第三が、最近評価面でも急上昇しており、全体的なバランスも良く、地域ぐるみで取り組んでおり、コーディネーターと学校園の連携も組織だってとれているという面で推せる。しかし、ファンドという点では、登美ヶ丘は独特の取組で、他にはない大きな特徴なので、なかなか結論は言えない。

加藤委員長： 書かれてあることで判断するとするならば、それぞれの内容がある。他に教育委員会サイドでは、小中一貫教育では苦勞されているのではと思うので、それを後押しするという気持ちもある。コーディネーター数は、9名と13名。一方、コーディネーター会議に全校園長が参加しているという特徴もある。校舎内に支援ルームが設置されているのは一緒だ。

中川委員： コーディネーターの数の多さという点ではどうか。生徒の数に比例しているのか、この2つではどうか。

加藤委員長： 登美ヶ丘と富雄第三では子供の数は一緒ぐらいなんですか。

事務局： 資料の⑤に中学校区別生徒・児童・園児数一覧がある。中学校の生徒数でいえば、登美ヶ丘は329名、富雄第三は188名だ。

石川委員： 富雄第三は小中一貫校なので、コーディネーターの数は少なくとも大丈夫だ。一方登美ヶ丘は、小学校が2校ある小中分離型なので、小中一貫教育を進めるにはコーディネーターは大変だ。13人はいないといけない。ただし、数だけで単純に比較するのはどうか。

加藤委員長： 登美ヶ丘は、拡大企画会議を設置していますね。

石川委員： ここは評価できます。校園長がコーディネーターと定期的に会合を持っているということは、学校経営者が地域の人と定例で話し合う場を持っているということで、ファンドと並んでとても大事なことですし、校長が変わっても毎年年間行事に組み込んでいける。地域と学校が話し合ったことが、学校園の活動に反映できるということで、組織として強化していくことが実現できている。ここも大事だ。

加藤委員長： 最初は単純に点数でと思って始めたが、点数に大きな差はないということで、内容でということを進めてきた。先ほど中川委員から、富雄第三はもう少し後でもよいのではという意見があったが。

中川委員： 今年協議会の会長が変わったばかりだ。総合コーディネーターはじめ大変意欲的に取り組んでいただいているが、もっと一つになりまとまってくればさらに取組として前進する。後になればより発展するのではと思ったのだが。

加藤委員長： では提案します。第1原則、4校は、この表においては、点数は横並びとみる。第2関門、会計をコーディネーターが担っているという点で2校を推す。第3関門、内容的には甲乙つけがたい。組織運営の面で、拡大企画会議を校園長を含めて行っ

ているという点で、登美ヶ丘中校区をという提案です。運営組織の組織体制で、一歩か半歩先へ行っているのではないかとことです。富雄第三はそういうことにはなっていないでしょうね。

事務局： 会議の中には入っていないが、奈良女子大の西村先生を講師とする定期的な研修会には、校園長や教職員も参加している。

加藤委員長： 富雄第三では、企画そのものには、校園長がそろって参加しているわけではないという確認でよろしいか。では、登美ヶ丘でよろしいですね。

6 平成25年度の事業について

7 平成26年度の事業について

・6・7一括して事務局説明（パワーポイントおよび資料②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑫）

・「評価方法のステップUP」の提案

加藤委員長： 最後の提案の審議をします。今まで我々は、プレゼンをしていただいて少し質問をしてやってきた。負担だから発表をやめるというのではないと思う。成果を生んでくる中で負担感がある、それに対していろいろな意見がある。それと、事業そのものはかなり浸透し、第一ステップの時期は終わった。プレゼンをして事業を熱心にやっておられる方には、こういうところを悩んでいる、こういうところを改善していくためにはどうしたらいいのでしょうか、他のところはどのようにしておられますか、ということで、さらに情報交換をして知見を得ていくヒアリングの形式にしてはどうか、という希望もあるので、公開にして評価の見える化を図り、評価方法をステップアップしてはどうかという意見です。われわれにとっては、プレゼンでコミュニケーションをするので、かなり重いです。

石川委員： プレゼンの時にはかなりヒアリングはしている。相談事はないかとか、困っていることはないかとか、実際に意見交換もしているプレゼンになっている。そもそも予算プレゼンをしたらどうかという提案は、私が最初の評価会議の時にした。世の中のベンチャー企業では、計画はまずくても人柄を評価して予算をつけましょうというようなことがあるので、計画書だけではなかなか地域の言っていることややりたいことが伝わらないので、実際に話を聞いて、評価をする。そして、高得点を得た地域に30万円とか50万円とかを上乗せするというようなことを実現してきました。公開に関しては個人的には常に否定してきました。公開しろと言ってきた意図が最初はちょっと不純でした。よそはどんなことをしているか見たいからとか。どうしても公開するというのであれば、総合コーディネーターが見るのであればいいのではという意見を言ったこともある。去年、総合コーディネーターとの意見交換をしましたね。公開したらこの制度は成り立たないのではないかと。公開しないでやってきて各学校の地域支援本部は伸びてきています。公開するくらいならプレゼンをやめたほうがいいと思う。見る側によって見る視座が全く違うということは、このアンケートを見ればわかる。校園長、総合コーディネーター、教育協議会長、それぞれの立場による違いがある。プレゼンを見ても何が良かったかという基準はわかりにくい。役所としては何でも公開したがるかもわかりませんが、公開するのであれば、われわれと同じ視点できちんと評価できる人に見せるしかない。そ

のうえで地域に話をしてもらおうとか、コーディネーターが集う場で発表してもらおうとか、あるいは、プレゼンテーションの在り方に関して総合コーディネーターと、こういう場で相談しようというなら分かる。見える化という言葉は何にでも使うのはよくないと思う。

加藤委員長： 公開するという事は、こういう事業計画書でこういうことをしようと思っているというプレゼンに、私たちが質問をする、それを、他の人たちも見ているということか。事業計画書・予算書は今までと同じものを提出していただいたうえでか。それも変えなければいけないと考えているのか。

事務局： 内容についても決めていかなければいけないが、項目の検討はのちほどしたいと思っている。がらっと変えるということはない。

加藤委員長： 公開にするというのは、今までの地域ごとのプレゼンを、他の地域の人も自由に見ることができる、陪席して傍聴できるということですね。

石川委員： これが企業コンペのようなもので、それで、例えば500万円をとれるかとれないかというのであれば、公正のため、公開する価値はある。しかし、基本的には出してくる予算はみんな通りますよね。公開することによって何を変えようとするのか、わからない。いろんな不満がある中で、これを見てないということだけがあがっている。例えば、教職員の負担が減らないという課題が、プレゼンを公開することで解決するのか、という議論はないのか。今解決しなければならないことの最優先課題がプレゼンの公開だろうか。

岡田委員： 評価によって高得点を得た所への傾斜配分はどれぐらいなのですか。

事務局： 傾斜配分に関しては、その年の予算を、学校園の数や子供の数によって配分させていただいた、残りの予算を、評価A：B：Cを、3：2：1の配分に分ける。去年でいうと金額でいえば、24万円：16万円：8万円です。C評価はありませんでしたので、24万円と16万円の差、8万円の差になります。

岡田委員： 評価される側にとって、一生懸命取り組んでもそんなに予算配分は変わらない。評価そのものに対する疑問、評価してもらうことで何になる、微々たるお金の額が違うだけだ、評価そのもののやり方をもう少し何とかしてほしい、という意見だと思う。プレゼンの場で、他の協議会が評価されることで、なるほどと学ぶこともないではないと思うが、われわれ評価委員のプレッシャーはすごく大きくなる。評価される側からすると、評価ということが、すっとんと落ちていないという気がする。

石川委員： 誤解があってはいけない。われわれはプレゼンテーションの評価はするが、その結果、金額の決定をするのは教育委員会だ。プレゼンテーションを公開することで金額に何らかの影響が出るというのはおかしい。

岡田委員： 金額に影響を出してくれと言っているわけではないのですよ。

石川委員： では何のための公開なのか。

事務局： 公開することで、他の地域の取組を見てみたいということです。

石川委員： 交流の集いはそのためにあるのではないか。

加藤委員長： われわれが交流の集いに行って、そこでの、質問・意見・コメント交換会をきちりすれば、ヒアリング形式にするというところはクリアできる。やったことに対

する評価ではなく、これからやることに対する評価で、予算配分も評価によって決まるということの緊張感と負担感は大きいのではないかと。何を持っていったらどういふふうに予算がつくのでしょうか、という気持ちでプレゼンされているのだと思う。どのように評価されているかを、クリアに知りたいという思いで、公開という言葉につながっている。先ほどのステップの話でいうと、最近はどうかと思うような予算の使い方は減ってきている。

石川委員： いろんな意見が出ることに對して、説明をちゃんとしていくべきだ。プレゼンを見たい、他の人の評価を聞きたいという意見は出るとは思うのだが、何もかもあからさまに出していくというのは行政のやり方としておかしい。性善説に立ったとしても、地域によって学校とのかかわり方は違う。例えば、生徒数の多い学校の人が、生徒数が少ない学校のプレゼンに対して、ほのぼのとしてほめられているのを見てどう思うだろうか。学校・地域によって実態や価値観の違いは大きい。それらを加味して客観的にみることが出来るだろうか。自分たちの地域の観点でしか見ない方が多いのではないかと。私たちは地域から離れた立場で客観的に評価している。また、われわれの発言も、意図しない受け止め方をされるということはないだろうか。委員がこんなことを言っていたと単語だけが独り歩きをすることもあってはないか。そういう場合に教育委員会はどのような対応をしていきますか。また、プレゼンテーションは何人来てもいいということになっているので、他も全部見たいということになると、はたして公開していいのだろうか。公開することによってどんなメリットがあるのか、ちっともわからない。聞きたいという要望に応えることはわかりますが、その点しかないのだったら、公開すべきではない。

加藤委員長： 公開してほしいという意図は、他はどんなことをやっているのか、やろうとしているのか、それに対して委員はどんなふうに評価しているか知りたい、ということだが、それは、交流の集いの充実化でいけるような気がする。予算が採択されるかされないかという瀬戸際の公開性を要求しているのではないでしょう。事業案を出したことに對して、どのようなコメントをつけてどのような予算配分をしているのだという仕組みならびに内容を見てみたい、そして自分たちで比較してみたいという要求ではないと思う。そういう要求であるならば、情報公開請求ぐらいしてもらわないと、ということになる。この全体は交流の集いに落としていきませんか。今日は結論は出ないので、交流の集いに落としていくということと、他がどのようなことをやっていて、そのことに對して委員がどうとらえるかという意見交換やヒアリングの場を拡充する、回数を増やす、ということはあると思う。負担感がよくわかる。現場の先生が背負っているところもあるので、それを減らす方向で考えてはいきたい。あれだけの用意をして、気合いも入れてやっておられることなので。今日は結論は無理なので、ご意見をいただきたい。現場の生の声を聞いておられて中川委員どうですか

中川委員： 単純にプレゼンというと、プレゼンという言葉だけでもけっこう緊張する。プレゼンの仕方は、企業とかよく発表している方でないとよくわからないと思う。単純に発表の仕方と考えるときに、自分たちはこうだが他はどうなのか見たいという気

持ちはわからないでもない。そこでの評価というところも、プレゼンする側からすると、自分たちはこういうふうに言われているけれども他のところはどういうふうに言われているか、ということが気になるのは、分からないではない。そのへんのところまで全部が公開となってきた場合には、プレゼンの順番によっても、コメントに影響が出るかもしれないので、微妙になってくる。プレゼン発表を公開するというのであるならば、こちらの意見なしで、プレゼン発表のみを公開するというのはどうか。その形式なら交流の集いでも可能かもしれない。それ以外に、評価会議というか、評価の対象となる形で、それぞれの校区の取組について判断し、意見を言ったりするのが、いわゆるプレゼンなんだろうが、活動紹介、活動発表プラスヒアリングのような形で、それを、プレゼン発表と呼ぶか、ヒアリング形式と呼ぶかは、言葉を変えるだけのことではないかと思う。

加藤委員長： ヒアリングというのは、行ったり来たりのコミュニケーションがある形だ。プレゼンは、発表の後質問があればそれに答えるという形だ。今日のところは3つ確認して、次につなげたいと思います。①今までの予算執行・予算配分にかかわるプレゼンは公開を見送る。②交流の集いにおいて、評価委員の先生方からのアドバイスや意見を言うことによってサジェスチョン・ヒントを与えるという活動は拡充する。③私も文科省のヒアリングの際に、終わった大学の方と情報交換をするが、負担感を持ってもらいたくはないが、書類を書いた人には勉強になる。書いて勉強になったと思えると、次が見えてくる。プレゼンの準備も同様だ。私も、採択されなくても勉強不足だったと思えるようになるまでに5年かかったが、負担感はあるが、勉強になるのは事実だ。

石川委員： ある程度の負担感・緊張感があるからここまで来ている、という考え方を教育委員会もするべきだ。悪いところ、意見のあるところばかりをあげつらうのはいいことではない。全国に例がないほどと言ってきただけの成果が出てきているわけだから。

加藤委員長： 駄目だ駄目だと言ってきた気はない。こうしたほうが良いというアドバイスをしてきたつもりだ。

岡田委員： それは逆で、コーディネーターや地域の方は、この評価が悪いとは思っていない。いいサジェスチョンをもらえているから、他の取組も見たいと思っておられる。公開するともっと学べるということだと思う。

石川委員： コーディネーターにダメだしするが、教頭にもダメだしするのを聞かせていいのか。そこが気になるところだ。

加藤委員長： それは一点目の公開の問題ですね。それはやめましょうよ。自分たちがその場でもっと得たいものがあるというのは、交流の集いに形を変えてもっていきましょう。

事務局： 地域の方からそれは出ていました。助言がほしいという前向きな意見が出ています。

石川委員： それを考えると、総合コーディネーターとの意見交換会を実施したのだが、やっぱりあの場では、ネガティブな意見が引っ張って行ってしまふ。予算が使いにくいとか計画書が書きにくいとかいう話が出て、最初にそれ言わないでと言っているの

だが、そこからスタートしてしまっ、どうしても満足感が得られなくなってしま
う。

事務局： 公開するというのは、昨年度から事務局として出させてもらっている。われわれ
としても、プレゼンを公開するという、評価を見てもらうということは全然
考えていません。これは別の問題で、地教が次のステップに行くために、会長、コ
ーディネーターも意見がほしいという声は昨年度から聞いている。プレゼンがいい
のか、ヒアリング形式、昨年度やった総合コーディネーターとの意見交換会を続行
してやったほうがいいのか、手法を考えたい。

石川委員： 手法としては、先進地の視察とか、他地域に見に行くというのが一番いい。それ
をずっとこれまでのヒアリングの都度言ってきた、先進校視察は数が増えてきてい
て、それはいいと思う。日本全国どこの学校支援本部に行っても、みんな同じ課題
を抱えている。すごくいけてそうだと文科省評価を受けているところでも、課題は
抱えているし、毎年大変な思いでやっている。解決策は与えられない。自分たちの中
で見つけていくしかない問題だ。事務处理的な問題だったら解決策的なものはあ
るかもしれないが、コーディネーターが増えないとか、学校とうまく意思交流でき
ないとか、提案したのに学校でつぶれたというようなことに関しては、慰めたり、
方法論を言うことはできても、解決策を提示はできない。よその地域との交流をし
ていくのが、遠回りのようで方法としては一番いい。そういうテーマなのか、事務
処理のような作業的なものなのか、区別した上で対処していく必要がある。

加藤委員長： そういうテーマを抱えて乗り越えた地域はあそこだから、一度見てきたらという
アドバイスはできる。しかし、実は、テーマを抱えていて乗り越えたという地域は
まだないわけですから、がんばりましょう、というコミュニケーションがとれる場
にしたい。公開か否かと対立的な構造ではない。これは、ゆっくりと時間をかけて
変えていきたい。ありがとうございました。以上で予定した案件は終わったが、何
かございますか。

石川委員： 一点だけお願いしたい。先月教育センターで行われた竹原さんの研修会の後で、
地域コーディネーターから、そういう地域支援のスペシャリストの講演には参加し
て勉強したいという要望があった。校園長会という研修の場だから、そう簡単には
いけないのではと答えたのだが、それは一理あるなと思った。岡田先生もおっしゃ
ったが、もっと前に行きたいと思う人たちの興味は、必ずしも地域支援の手法とい
うような狭い範囲ではなく、学校が抱えている問題は何かとか、社会と学校をどう
つなぐかという点では、管理職対象の研修のテーマと一致することが多い。ただし
これは、校園長会がうんと言わなければならないことだ。学校の先生方の受けてい
る研修で、比較的オープンなものに対して、希望するコーディネーターの参加につ
いて、総合コーディネーターに限定するか、コーディネーター全体に広げるかは別
として、検討いただけないかと思う。できれば来年度から実現していただきたいと
思う。

事務局： 今年の研修につきましても、教職員研修にコーディネーターの方が参加いただく
ということも、教育センターの許可を得て、実現した。

石川委員： ところが、よりによって、地域支援のスペシャリストである竹原さんをお呼んだのになぜ参加できないのか、横浜まで行かなくても済んだのに、ということです。

事務局： 教職員研修ということで、今年度については管理職の方々に研修をしてもらったのですが、あの内容であるならば、コーディネーター研修を別に持っていますので、そちらのほうで、竹原さんに限らず、地域で先進的にやっておられる方をお願いしたい。

石川委員： そうなると話がまたひっくり返るので、はっきり言うと、校舎長会の研修でも、コーディネーターにオープンにできないかという話をしている。例えばそれが、問題を抱えた子供に対するケアということでもいいわけです。

加藤委員長： コーディネーターも参加できるというものの情報提供ができたらいいい。非常に熱心に学びの機会を求めておられる。こういう分野は、何がどこでつながっているのかわからないので、そういう情報提供ができたらいいい。熱心な方たちなので、いくつも階段があればずっと登っていくのではないかと思う。では、本日の議事はこれで終わります。ありがとうございました。

8 その他

事務局： 次回の日程調整について。12月2日午前中か、9日午前中どちらかを予定。

閉会

平成 年 月 日

署名委員

署名委員
